

一職種を極める瞬間

安部正敏*

4月号で筆者の所属が変わったのをお気づきの先生が多く、お問い合わせを多数頂いた。これ以上仕事を増やしたくない編集部Tさんの指示で、急遽この件に触れさせて頂く。この春、20年奉職した大学を辞し新たな道を選択した。24歳で皮膚科医になり、定年を65歳とすると丁度折り返し地点である。筆者の尊敬するジャパネットたかたの高田社長が通販に乗り出したのは、丁度同じ43歳であり、いつしか自らの将来を考える時期を迎えた。無論皮膚科医としては変わらないが、仕事内容は変化し、新しいことを覚える日々である。

最近の鉄道会社社員は、駅務の後車掌になり運転士になり、その後また駅務に戻るというローテーションを行う。すべての職を経験し他職種の重要性を知る一方、オールマイティーの社員を養成する狙いがある。しかし、以前の鉄道員は一職種を全うするのが常であった。運転士はひたすら経験を涵養し、車掌は熱心に乗務を重ね、その結果かなりベテランになって初めて、花形の特急列車に乗務できたものである。特急専門に担当する運転士や車掌長は、エリート中のエリートであった。

運転士にしる車掌にしる、一職種を全うした最後の乗務ではドラマがみられ、終着駅に到着後、同僚や家族から花束を渡される乗務員を何度か目撃した。しかし、鉄道員は安全運行が最大の任務であり、花束をもらっても涙ぐむよりは安堵の

表情を表すのが常である。現実主義の筆者は、花束など所詮枯れてしまい、それならむしろ最終乗務に着用した制服などを進呈するほうがいいのではないかと思ったが、制服を着ている限り鉄道敷地内では警察権も持てるので厳重に管理されており無理な相談である。

大学での最後の乾癬外来。最終日とあって多くの患者が来院した。剩え、最後の患者は「辞めるなど全く聞いていない」とフンガイする男であった。這う這うの体で診療を終えると3時間オーバーである。24歳予診係でデビューした外来。完全個室化の際、予算不足の為休日に自ら一人で机を動かし、外来を整備した思い出が蘇る。しかし、無機質な外来は静まり返り、寒々としていた。

待合室に出る。すると、乾癬患者が輪になって待っているではないか！本日受診のない患者までもが集まり「お疲れ様でした」「ありがとうございました」と声がかかる花道の出現にちょっと照れる。大学を辞めると決めてから

も迷い、悩むことも多かった。診療と関係ない些細な事で落ち込むこともあった。しかし、そこに集まった患者達は、何が尊く、筆者が今後何をすべきかを教えてくれた。迷いが消えた。そして、熱いものが込み上げてきた。職務を全うした安堵の表情は、涙を流すのと表裏一体であることを知った。

花束を手にする女性患者の腕にはいつも見慣れた乾癬皮疹がある。筆者にとっては素敵なコントラストだ。拍手が湧く。新しい世界への旅立ちの瞬間である。花束が差し出される。色とりどりの花々はかすかに揺れ、無機質だった外来にほのかに甘い香りが漂った。20年間、一度も外来で経験したことのない心地よい香りを放つ勿体無いほどの大きな花束は、これまで筆者が見たなかでそれはそれは一番美しい花束であった…



* Masatoshi ABE, 医療法人社団 廣仁会 札幌皮膚科クリニック, 褥瘡・創傷治療研究所

図の説明：上越新幹線 200 系電車。筆者と同時期に卒業を迎えた僚友。最後は開業塗装に復元され有終の美を飾った。